

加治首相はプロフェッサー鷲羽（以後、鷲羽ちゃん）と会談を行っていた。

ちなみにめずらしく会談場所は鷲羽ちゃんの自宅。今現在彼女は様々な分析などで忙しい為にほかならない。ベヒモス事件における映像資料は非常に少ないため入手に苦労したが僅か三日で地方の人間のビデオテープを手に入れたのである。ちなみにそのテープはかにマークつきだったりするが。

首相たるものが自ら研究者の自宅...という話もあるかもしれないが、彼女はVIP中のVIPである。加持首相にしてみれば「いつもわざわざ来ていただいている」なのである。

今回の話はASの件で会談を行っていた。

「とまあ、そういうことになるのよ。いまはASよりレイバーのほうが信頼性においては勝るとみていいわ。1年の違いは大きいわね...ん？」

と、彼女が説明を終えるのと同時に彼女のふところから電子音がする。

「おっほほー、再起動しなおしたセンサーがなにか拾ったみたいね。うふふ...今回の魔法センサーにひっかかったのはなーんだ。」

ピッポッパとスイッチを押していく鷲羽ちゃん。

すると天井、壁際から大型ディスプレイがするすると降りてきて、映像を映し出す。

そこには帝都区の風景が映っている。

加治首相は一瞬眉をひそめる。

「鷲羽ちゃん...この映像はどこから映しているんですか...？」

「ああ、帝劇前よ。米田ちゃんに頼み込んで置いてもらったのよ。他にも帝都区にはいろいろと協力者をつのって置かせてもらったわ。」

鷲羽ちゃんは理由を手短かに話す。降魔にたいする情報を集める為であると。...ちなみにこの映像、鷲羽ちゃん独占。

「隠し撮りはあまり...」

「細かい事は気にしない気にしない。...って、なにこれ？」

画面はピクシーの姿をうつし、ついでコバルトの姿を映す。

「...ハロウィンじゃないから...まさか本物の悪魔!？」

「なんですと!？」

加治首相も映像の様子を食い入るように魅入る。

「こりゃ...すごいわ。」

大型ディスプレイを分割して幾つかの地点の映像を映し出す。そこには様々な悪魔の行動が映し出されていた。

と、そこで加治首相のつきのセリオ = アユミが携帯電話を静かに首相に差し出す。

「誰からだい？」

「米田中将からです。」

加治はそのまま携帯を受け取る。

『...加治首相。申しわけない。』

いきなりの謝罪。

「なにがあったのですか　いえ、愚問でしたね。悪魔騒ぎのことですか？」

『ああ...。今、あ、すまんちょっと待ってくれ。』

...大神が戻ってきたか。向こうから...そっちは全員OK...でも...そうかやはり整備がおいつきませんか...

『いきなり電話口から離れて申しわけない。悪魔騒ぎのことはすでに耳に入っていましたか。』

「ええ。それでなにが...」

『悲しい話だが今回の件...帝都区全域に広がっており、華撃団では完全に人手不足になっています。あのベヒモス事件のあとで巴里華撃団の光武も出せない。』

霊力の過激な過負荷によって全機オーバーホールに出さざる終えなくなっていたのである。

「...そうですか」

『そこで次善手として、GS関係者に今回の事件の打破を頼みたいのです。分解整備も今は組立の真っ最中でそれも急がせておりますからあと3時間もあればできるでしょうが...そのあいだに被害が拡大する事は自明の理です。』

「わかりました。美神さんにGS関係者への依頼はお願いしておきましょう。ですが、もしもの事態にそなえ出撃の準備は整えてください。」

と、加治首相が答えた直後に鷺羽ちゃんが手を叩いて喜んでいた。

「すごいじゃない。今回のこの悪魔...手元に置けるんだ...ふいふいふいふ...これはいくしかないわ！」

映像にはピクシーを抱いた女子高生が映っていた。ピクシーはすでにかなり懐いている。それは鷺羽ちゃんの興味を惹くに十分すぎるものであった。かくして鷺羽ちゃんは加治首相を無視　否、残して風のように去っていった。

さすがの加治首相といえども、啞然として1分ほど固まってしまったのであった。

ちなみに帝都区周辺はすでに交通止めになっており、それに加え閣議の時間が近づいてきた為鷺羽ちゃんは結局、悪魔を手にする事ができなかったとさ。

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝 / Face Earth

Ep02. 季節はずれの恐ろしさ

C = PART

Date 02. 05/09

美神の手によるGSへの依頼は、ここ羽村亮と七菺鏡花の事務所にもやってきた。

「むっ...受けたいがダブルブッキングになってしまうな...」

亮は腕を組んで唸る。

「ダブルというかトリプルなんだけど。」

鏡花が突っ込みをすかさず入れた後、再び考え込む。

「相手側の御指名であたしがこっちで亮がこっちに行かざるを得ないのよね...」

「で、真言美ちゃんたちは未だに学業中って...さて、どうしたものか。」

亮は腕を組んで悩む。

わかってはいる。この依頼は受けたほうがいい。額面も悪くないし、なにより美神美智恵とゆえばGS業界では神様のような地位の人物である。これに悪印象をもたれるのは拙い。だが、すでに受けた依頼を先延ばしにするのはプロの姿勢から逸脱する。

ちなみに御指名と鏡花はいていたが、これにも理由はある。二人は登録を行なっている為、信用という点においてまず違う。そして正直な話、GSの活躍をホームビデオなどに取るというのは意外に日常茶飯事なのである(ちなみに某守銭奴は撮影する場合、金を取るので行なわれる事が少ない...まあ、いろいろと後ろ暗いことをおこなったりすることも一因だったりするのだが)。まあ、危険な場合は退場していただくことも多い。というか普通は出来る限り退場していただく。

が、こういう映像が残るとというのは口コミ宣伝には実はもってこいなのである。

で、宣伝要素となると当然ながらそこには見栄えというものがある。鏡花はモデルを行なった事もあるうえ、チロというオプション、しかも牙による攻撃はともかく翼の技を使うと非常に「絵」になるのだ。

オファーが来にくいこの業界(常識に捕らわれた人物ならまずしない。また頼もうとしてもやはり値が高い)あなた、よくなるかどうか全く未知なものに、しかも騙される可

能性があるものにゆうに6桁もする出費できますか？ などなど)で名声も少ない新人がそれなりに食っていけるにはそれなりの訳があるのである。

なお、鏡花に限って言えば彼女はモデルも兼業している。もっとも品評会などに出場するようなものではなく、雑誌用の広告モデルレベルではあるが(それでも十分高いというかもしれないが...)

「羽村君...私と刹那がいこうか？」

「え...ですが...」

「腕の程は君たちも知ってのとおりだ。並の相手なら遅れはそうそうは取るまい。今回は集団相手ということらしいことを考えるとカイトやミュゼルクンより適任だろう。」

カイトは集団殲滅技をもたないし、ミュゼルクンは回復を始めとする支援能力はきわめて高いが本人自身の応戦能力はその支援能力を自分につかって並程度である。大群で攻められると脆い。

「...仕方ないわね。亮。どのみち選択肢はそう多くないんだから。」

「...だな。すみません、甲斐那さん、刹那さん。」

「謝る事はない。こういうときにこそ今まで世話になったのを盾にとるのが普通だ。」

「...じゃあ、そういうことで。」

甲斐那の言葉に、亮は頭を下げながら されど台詞は軽く、頼み込んだ。

「ではいってこよう...ところで、どうすれば依頼の地点にいけるのかは？」

「向こうからハイヤー...送迎車が来るとい事なのでそれに乗っていただければ。」

亮は携帯から依頼受諾の旨を送る。すぐにハイヤーはくるといことだった。

黒い霧はそのままウェンディゴの身体に纏わりつき...その身体を侵食していった。

「ふいふ...今度の身体は前回とは違うな...。」

身体能力を確かめるかのように動く。

「...なにものだ？」

そこへグレムリンを従えたイハビーラ=ティターニアが声をかける。

「それはこちらの台詞だ。他人に名前を尋ねるよりも先に自分の名を告げるべきだろう。」

「失礼。私はイハビーラ=メッコーだ。」

「...ほう。我はラガウリだ。」

「自意識を持った...いや、ちがうな。先ほど黒い霧が包んでいたが...あの黒い霧がラガウリ、君の本当の姿なのかね？」

「...それを聞いてどうする。ええ？人間。」

イハビーラはここで苦笑する。

「この私の姿をみて人間とは...どこに目をつけているのかね？」

「さあてな。身体こそなかなか高位の存在をつかっているようだが...魂は人間のものではないか。」

「...ふむ。節穴ではないことは確かなようだ。だが、私の問いに答えはぐらかすのはどうかな？」

緊張感のあるやり取り...なのだが、イハビーラのほうにはどこか余裕のようなものがある。ラガウリにも余裕のようなものがある。

しばしの間沈黙の後にラガウリのほうが口を開く。

「肯定であり、否定だ。我は神だ。だが、今はその身体を失い、魂の器に相応しいものを捜している。」

「ほう...して、貴君自身の能力は？」

「さて...魂の器によるのでね。」

イハビーラはここで相手の能力を瞬間的に推し量る。神となのるわりに力は器による。そして...いま感じる気迫。この二点から考えられる答え。

「貴君の力は増幅機...と考えるとよいのかな。」

「...そうだな。ブースターでいいかもしれんな。だが 極限にまで高める事が可能だぞ。そうたとえば...このようにな。」

ラガウリはそこまでいうと一声吼えた。

...が、なにも起きない。

「...なにをした？」

「直にわかる...そう、空を見上げてみる。」

「なに...む。」

空を見上げたイハビーラは唸る。

晴天だった空にどんよりとした雲がいつの間にも現れている。

「この体...出現する時は雪の日ではなんという話でもあったのかな？天候操作能力があったわ。...もっとも封印されていたような力ではあるがな。」

吼えてから3分。雪が降り始めた。5月に東京都に、雪である。

「はははは...これは凄い。素晴らしい。」

「だろう？ ...さて、この我の降臨に相応しく、最初の犠牲者になってもらおうか。」

ラガウリ=ウェンディゴはじゅくじゅくと歩みを寄せる。その身体は徐々に大きくなりつつある。

「ふふふ...ラガウリ。君の力は素晴らしい...だが、その身体では私には勝てんよ。そう、絶対に、だ。」

「なにを迷い事を。」

ラガウリはそういうとすでに巨木ほどの太さになった腕をふりあげ、5mにも伸びた身長から振り下ろす。

ガゴン！！

ものすごい音をたてて、イハビーラの身体は地面に潜る。

「ははははは。この体が格下だと思って油断したか？」

「いや、違うな。『その身体をいくらブーストしても私には無意味』だということだよ。メギドラオン。」

最後の言葉とともに大爆発。ラガウリ＝ウェンディゴの身体は地面と共に吹っ飛ばす。

「ぐおおおお...な、なんだと...!？」

そのあまりの威力にさしもののラガウリもたじろぐ。帝都区のはずれとはいえ、そこには小規模ながらクレーターが出来ている。そして、その中央には無傷のイハビーラが立っていた。

「ふむ。基本衣装分については私の体の相性がそのまま適用されるのか。てっきり裸になってしまうかとも思ったが、これは意外意外。」

羽根を羽ばたかせゆっくりと浮き上がり、ラガウリの視点と同じ高さに自分の視点を持ってゆく。

「ラガウリ...といったな。貴君と取引をしたい。いや、提案だな。」

「なんだ？」

「その身体は本来、私の持ち物だったのだが...貴君の復活、いや降臨の祝儀として贈呈しよう。」

「なにをいうか。物理が効かないようだが、こいつはどうだ！　　ブフ!!」

ラガウリの言葉とともに氷の塊がラガウリの頭の上に瞬間的に出来上がる。そして、それはそのままイハビーラに向かう。が。

なにか障壁のようなものにあたったかと思えば、そのままラガウリめがけ跳ね返される。氷の塊はそのままラガウリに命中するが、彼の身体は傷ついていない。

「な...反射、だと...？」

イハビーラは不気味な笑み　　ティターニアの可愛らしく気品のある姿でそれを行なえば妖艶な笑み　　を浮かべる。

「いやいや。この身体を作り上げる際には最新の注意を払ったものだよ。この私の身体は殆ど全ての攻撃をさきほどのように無力化...もしくは反射する。基礎能力もかなり挺入れしたものだしね。もっとも...防御面をあまりに重視してしまったために能動手段はたかがしれてるがね。」

ここでイハビーラは名刺...をとりだそうとしたが、流石に相手の肉弾攻撃の一撃を受けたときに消えてしまったことに気付く。

「まあ、話の続きだ。貴君にその身体を提供する。が...もし、その体がなくなったときは私と同盟を結ばないか？」

「同盟...だと？」

「うむ、同盟だ。貴君には様々な身体を進呈する...そのかわりに私の望む行為を行なってもらいたい。」

「それはお前の下につけ、ということか。」

「一時的にはそうなるだろうな。」

ラガウリは笑う。

「この我がそんな提案を受け入れると思うか？」

「まあ、このままだと無理だろうな。だが 私は別に権勢欲というものについていえばさして強くないと思っている。つまり私はいつか貴君の下につくこともやぶさかではないと思っている。ただ、私の望む世界がそこにあればいい。私の望む美しい世界があれば、支配者など誰でも構わない。...いや、一応最低限のきわめてわかりやすい基準は設けさせてもらうが、それもさして厳しいものではない。」

「どういうものかな？」

「美しいものを壊すな、だ。わかりやすかろう？」

「わかりやすいが、多分に私観の入る基準だな。」

「だが、壊さなければ好き勝手やってもいい。そういう意味ではなかなか良いと思うがね。」
イハビーラは言葉にしばし黙考するラガウリ。

「ならば、もうひとつ尋ねておこう。お前のいう美しいものとはなんだ？」

「決まっておろう？ 自分で選んだのだぞ、この身体は。」

ラガウリはここで始めて大笑いをする。それはもう、腹がよじれるように。

「なるほど、納得した。おおいに納得した。それを壊さずにすめばいいのだな。なるほど、お前はおもしろい男だ。否、おもしろい魂だ。」

ラガウリはひとときしり笑った後、笑みを残したまま告げる。

「お前のこと、覚えておこう。その魂の色と匂いを。もっとも、この我が敗れることなど無いといっていいがな。」

イハビーラはその言葉に苦笑する。

「まあ、貴君の力なら確かにそう簡単に破れる事はないだろうが...井の中の蛙であらんことを祈っておく いや、井の中の蛙であってくれたほうが、私にとっては嬉しいことなのだよな。」

「ほざくがいいわ。」

「まあ、あまり期待せずにまってるよ。ラガウリ。だが、また会ったそのときは...先ほどの提案を受けるということで話をすすめるが、いいかな？」

「よかろう。期待せずに一生が終わるまで待つがいい。」

イハビーラはグレムリン達を呼び戻すとその場を立ち去った。この会合はグレムリンのおかげで映像資料として、音声資料として残る事はない。

「雪...!？」

加治首相は鷲羽ちゃんの自宅から閣議に参加するため議事堂へと戻る。その玄関で雪が降り始めたことに驚く。

「はて、これは面妖な...」

ほぼ同じ頃に到着したらしい、榎木勝仁国家公安委員長がその加治首相の背後で率直に

感想を述べる。

「加治首相...鷺羽ちゃんと一緒にではないの？」

「彼女は...帝都区の一で飛び出してしまいましたよ。」

「ほっほっほ...一国の首相をほっとして飛び出すとは...。」

「まあ、仕方ありませんな。なんといっても彼女はまだ子供です。自分を押えきれないこともあるでしょう。」

加治首相は鷺羽ちゃんの行為を微笑ましく許していた。

「ですが、この雪...帝都区の騒ぎによるものでしょうか？」

「さて、鷺羽ちゃんがいればすぐにわかる」

キキーツ！

という大きなブレーキ音で勝仁公安委員長の言葉がさえぎられる。やってきたのは一般の自動車ではなく、鷺羽ちゃん謹製の自家用車であった。

「加治ちゃん、大変なことになったよ！」

鷺羽ちゃんはそういうと議事堂の中にはいるようにせかした。

閣議室に入ると他の安全保障政策会議の定例メンバーが揃っていた。

「さてさて...今回は本来なら有明事件の追加報告がメインだったんだけど...大・変・更！！」

鷺羽ちゃんはそうやってノートパソコンを取り出してテレビ画面に接続する。

「至急まとめたものだし、まだまだ現在進行中の事件の話だから今後の展開によってはこの話の内容は大きく変わることがあることを先に述べておくわ。」

そうやって鷺羽ちゃんは一枚の画像を映し出した。

「加治首相はあたしの家で見たと思うけど、帝都区にて一大悪魔騒ぎがおきたわ。」

「悪魔騒ぎ、ですか」

榎木公安委員長が発現する。

「降魔ではないのですな。」

「ええ。降魔事件とするにはかなりほのぼのしたものよ。結局大渋滞によって、帝都区にはまったくいけなかったんだけどね。帝都区に入れてたらここに悪魔の一匹でも連れてこられたかもしれないんだけどね。」

ほぼ参加者の全員が流石に眉をひそめる。

(この閣議の場に持ち込むつもりだったんですか...?)

「さて、この悪魔だけど 奇妙なのよね。」

鷺羽ちゃんはそういうと画像を変える。

「これはあたしが帝都区周辺に設置した定点カメラから撮影した種類ごとのものなんですけど...」

ピクシーならピクシーのみ、オークならオークのみと映し出していく。

「さて、なにか気付いたことはないかしら？」

土方防衛相が手を上げる。

「はい、土方ちゃん」

「みな、同じようなサイズってことですか？」

「惜しい！」

こんどは加治首相が手を上げる。

「外面がほぼ同じ、ということですね。」

「加治ちゃん、鋭い！まったくもってそのとおり！！」

鷲羽ちゃんは一つ手を叩く。

「加治ちゃん言葉どおり、個体ごとの差違は殆どないわ。今回、オブザーバーとして急遽呼び出しをかけたんだけど...そろそろくるころよね。」

バン、と扉が開かれる。そこには美神美智恵の姿があった。

「召集に応じ参上したわよ。鷲羽ちゃん。」

「はい、どうも～。もっとも、この場でひとつ尋ねたい事があるだけなんだけどね？」

「なにかしら？」

鷲羽は映像をみるように告げると先ほどと同じように種類ごとの映像を見せる。

「どう？」

「...ふむ。これに対する率直な意見を述べよ、てことね。 作り物の悪魔ね。」

「それはGSの経験から？」

「ええ。いくらなんでも同じ種類だからって、ここまで同じ個体はまず、存在しないわ。」

「はい、ありがとうございます。忙しい中、すみませんでした。」

「これでいいの？」

「はい。では、帝都区のこの事件の対処に戻ってくれて構いませんよ。」

鷲羽ちゃんはそう言って手を振る。美智恵もそれにこたえ、一礼すると早々に立ち去った。無礼な部分が多いが、彼女は今現在非常に多忙なのである。

「実際私も同じような評価をくだしてたんだけど...これでほぼ確定かしらね。」

鷲羽はそういうとモニターの電源を落す。

「今回の事件は人為的なものよ。」

閣議室の面々はその一言によって厳しい顔になる。

「それも私たちの知るどの人物以上に神秘学の造詣の深い人間もしくは、存在の犯行。」

...鷲羽ちゃんはそう述べるが、イハピーラ自身はいうほど神秘学への造詣は深くないことをここで付け加えておく。彼のDDSの造詣は我々がゲームで楽しむ、継承と進化の楽しみと差がさしてない。まあ、我々と違い、最初の予備知識が本来存在しないことと、もともと研究好きなところがあったからだが。

もっともDDSの作者については、語るまでも無くものすごい造詣をもっていたことが想像に難くない。

「正直な話、今回の悪魔達はいうほど強いものじゃないみたい。それどころかそのへんの

神秘に縁遠い人たちに懐いてしまったり、ちょっと武道...初段レベルね...をたしなんだ人でも対処できるくらいお粗末なものよ。それでも今回の件には何らかの意図があるとみていいわ。」

「鷲羽ちゃんがそういうからには...何らかの予測はすでに出来ている、ということだね？」

柎木公安委員長の言葉に鷲羽ちゃんは頷く。

「まあ、だいたいわね。デモンストレーション、ってところでしょ。」

「デモンストレーション...。」

数人の口から復唱される。

「誰が作り上げたか知らないけれど...数を作れるとなれば、間違いなく『売り込める』ものよ。もっとも売り込むのは商品なのか、政策なのかで呼称は変わるでしょうけどね。」

死の商人か、テロリストか。

「まあ、愉快犯という線もないことはないけど...愉快犯なら総勢400体も放出しないうわ。」

土方国防相は調度このときコーヒーを口につけていたが...400という数字の時に咳き込む。

「鷲羽ちゃん...その400は本当ですか？」

「ええ。センサーの精度をあげて個体数を確認できるようにしただけのことはあったわ。正確には422体。まあ、うち200体は無害もしくは、さっきのピクシーの映像のように物怖じせず声を掛けた者に懐いちゃったみたいだけ。」

「それでも危害をくわえるものが200匹以上いるわけなんですね？」

確認を求める加治首相の問いに鷲羽ちゃんはひとつ頷く。

「だからこそ、GSを駆り出す騒ぎになったのよ。それに華撃団には待機しておかないと困るし。」

「と、もうしますと？」

官房長官の問いに鷲羽ちゃんはすぐに答える。

「降魔よ。もっとも5月5日の有明事件に呼応することがなかったから今回も呼応するかどうかは微妙だけど...一番今回の事件を引き起こせる勢力でもあるわ。」

ちなみに鷲羽ちゃんは今回の事件に降魔勢力が呼応することはない考えている。...が、まさかオーバーホールで出撃不可能という華撃団の実情を今現在の閣議のメンバーに知らせる必要はないと判断しての言葉である。デモンストレーションということであれば『敵役』が必要であり、帝都区でそれを行なうということは華撃団を仮想敵にしているという思惑があると推理できる。

そして集めた情報の中で、という制限はあるがすくなくとも暴れ回っている中ではどうみても華撃団を相手にできるような悪魔は居ない。つまり、メインディッシュがあれば、華撃団の出撃にあわせ投入するつもりだろうと考えられ、そして投入されれば、市街地の真っ只中で激戦が繰り広げられる可能性が高い。

鷲羽ちゃんの最終判断は米田中将をかばう（全機、整備中という状況への非難の矛先が向かないように）+華撃団の出撃はできれば見合わせるのであれば見合わせるという道だった。

加治首相は鷲羽ちゃんのこの高説を聞いて他の人間に気付かれないように苦笑していた。が、ひとつ気にならないことがないでもない。加治首相は手を上げる。

「鷲羽ちゃん。ひとついいかな？」

「加治ちゃん、なにかしら？」

「外の雪...あれはこの事件と係わり合いがあると思うかい？」

早めに議事堂にやってきた人たちはこの言葉で一斉に窓に目をやる。あきらかに外には雪が降っている。

「...それ、なんだけどね。」

モニターを再びつける。そしてノートパソコンの操作。

「華撃団から送られてきた映像よ。撮影は市民だけど。」

帝劇の屋根の上から街の様子を眺める一人の女性の姿が映し出される。一様に、「ほう...」とその美貌に魅入ってしまう。

「明らかに格上の存在とみていいわ。これが主犯なのか、実行犯なのか、それとも...この大量の悪魔を只管理するだけの存在なのか。そこはわからないけどね。」

と、このときドガシャンという音が外から聞こえる。

どうも議事堂前で議員を乗せた車がスリップして他の車にぶつかったらしい。

ここで加治首相ははっと気付く。

「東京都に降雪があることを緊急報道！、特に自動車の速度を控えるように伝達！あと、この降雪がどの範囲にまで広がっているかの確認を！」

「降り始めて20分...まだ積もらないでしょうけど...」

加治首相の厳命を聞きながら鷲羽ちゃんは呟く。

「だんだん強くなるということは華撃団が出撃可能になったときには積もってるわね。」

その鷲羽ちゃんの声はあまりに小さく、誰にも聴こえなかった。

その鷲羽ちゃんの予想は当たる。想像以上に速い形で。

5月9日、13時15分。東京都帝都区において降魔発見の第一報。

13時49分。東京都に降雪を確認。

14時11分。東京都、神奈川県北部、埼玉県南部、千葉県西部に大雪注意報発令（この時点での降雪量はさほどでもないがあまりに季節はずれの為と緊急報道の内容もあり発令となった）また臨時に設けられた寒波注意報が発令された。

政府からの緊急報道で帝都区での事件が公表。これにより周辺道路の交通規制が開始。また、帝都区（+秋葉原）全域に避難勧告。これはより凶暴な存在の出現の前触れとも考

えられることからの処置である。

14時20分。東京管区気象台より東京都の気温発表。最低気温、帝都区で零下1度（事件前は18度だった）。

これにより民放各社は緊急特番を組むことに。そこでは有明事件との関連性を指摘する声もあがった。

交通関係において、新幹線は横浜～東京間では徐行運転を余儀なくされる。また首都高速では交通事故のため、登り下りともに5kmを超える渋滞が発生。

病院においてもこの急激な気温の変化で頭痛・吐き気などを起こした人たちが増えてきた。

これが時空融合後の都心における初の大規模な天候災害となる。

もっともそれは季節はずれの大雪という笑えない事態であり、悪魔の恐怖を植え付けるには十分な事件となる。

と、いうわけで...5月に大雪です。

また、台風を始めとする天候災害での被害を特筆した作品もないために、「初の大規模天候災害」にしました。

しかし有明事件（5日から6日未明にかけて...という元でここでは話かいてますが...まちがってないですよ？）のほぼ直後とっていい時期です。

問題あるかもしれませんが...今回のこの件においてはほぼ広域災害だけですのでご容赦を...